

璉城寺通信

70号

2022年7月1日

璉城寺通信編集委員会

〒630-8307

奈良市西紀寺町45番地

TEL 0742-22-4887



手前は紀貫之の墓

「ラジオ深夜便」で全国から拝観！

下間景甫

観測史上一番早い梅雨明け…。暑い毎日ですが皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。地球温暖化が心配です。

4月、お寺の大切な専修念仏会を無事に勤めさせていただきました。奈良県観光課から毎年派遣していたスタッフの支援を今年はできないと連絡がありました。これは小さなお寺にとって大変なことで、いろんな方々と善後策を相談しました。おかげさまでお手伝いを申し出てくださる方々に恵まれ、あつという間に5月1日を迎えました。コロナ感染の拡大を心配しながら、マスク、手の消毒に協力いただきました。

5月4日の夜、午後11時5分からのNHK「ラジオ深夜便」で倉橋みどり先生が璉城寺を紹介くださいました。倉橋先生は璉城寺で行う俳句会の主宰です。深夜にもかかわらず、ラジオ放送を聞いたという人がおおぜいお参りに来てくださいました。しかも北は北海道から南は熊本まで、拝観したあと晴れ晴れと感想を述べられました。「なんとなくラジオに耳を傾けていたら、珍しい仏様、大山れんげ、ニオイバン茉莉花などと聞きました。これは何としても拝観したい。仏さまにお会いしたい…とメモを取り、翌日ネットで探しました」。子供にも調べてもらった。など、初めての拝観者のお話を伺うのが楽しみなな

りました。

なかには若い時に脳梗塞で半身不随になって車椅子生活されている方が娘さん夫婦に連れてきてもらって「よかった。きて本当に良かった」と涙ながらに感動されている姿にこちらもうれしくなりました。

この新たなご縁をつくってくださった倉橋先生に感謝せずにはいられません。

お手伝いの方たちにも感謝です。「このお寺が好きだからお手伝いさせてもらっています」との声にはまた感激です。一か月の長丁場は皆さんお手伝いなしでは出来ないことです。蔭になって拝観者を迎えていただいたお手伝いの方々のおかげで拝観月を乗り切ることができました。改めて感謝申し上げます。

.....

7月23日は地藏盆、8月はお盆と、恒例の行事があり、忙しいことですがお勤めできるのもうれしいことです。

コロナ感染も何とか落ち着いてきたようです。この調子でいくなら秋には「大人のお月見会」ができそうですね。「ぜひやってください」の声が多いので楽しみにしています。

暑い夏ですが皆さまどうぞお体をご自愛くださいませ。

合掌



璉城寺・蓮華句会 (6月9日)

ニオイバンマツリや、オオヤマレンゲが一面に咲いていた5月の特別拝観が終わり、璉城寺の境内は額紫陽花の葉が青々と重なり、季節の移り変わりを強く感じました。

璉城寺で吟行して3句詠むという宿題でしたので、教室の開始早々から清書用紙が配られて句会モードになりました。時折庫裏を通り行く風を感じながら選句が読み上げられる度に、詠み人の思いと情景が披露され、俳句の鑑賞は2倍にも3倍にも深まっています。ご指導は、俳句結社 寧楽 主宰・倉橋みどり先生 (安西俊樹・記)

主宰特選

ひいふうみい茉莉花やがて紫雲海
茉莉花や阿弥陀もなざる薄化粧
堂の隅密かに拝む蜘蛛の足

主宰佳作

ならまちの軒端をぬうて夏燕
五月晴ちさき平和の鐘を打つ
叶うなら浴衣もいね阿弥陀さま
バンマツリ貫之も酔う璉城寺
仏笑み天女(オオヤマレンゲ)に見つめられ

互選

万緑や客人の笑顔庫裏に満つ
璉城寺琵琶茶で交わす初夏の風
薫風まとうみ仏璉城寺
梅仕事終え湯呑み持つ爪のアク

そのほか

阿弥陀堂背には守りの柿若葉
柿若葉古寺の裏手にトランポリン
茉莉花の天の川いま君渡る
みほとけの指からすつと戻れば夏
風薫る白色阿弥陀の古刹かな
夏めくや花らんまんの璉城寺
匂い立つ女人阿弥陀古刹涼し
茉莉花の香に包まれし貫之碑
雲に乗る女人阿弥陀や風薫る

主宰詠

開帳の夏やまぶしき門開く
指細き女人阿弥陀も聖五月
年ごとに仏は若し新樹光

京終さろん

京終さろん4月は、奈良医科大学名誉教授・羽竹勝彦さんが「愛と生と死と法医学」と題し、昨年10月上梓した『命に寄り添う法医学』をもとに分かりやすく語られました。



まず法医学とは何か。最近ではテレビドラマで扱われて認知度は高まっています。高校3年生の時、友人の死をきっかけに「死」とは何かを考えるようになり、医学部で法医学の講義を受けたとき多くの遺体を見た。その死因は年齢に関係なく様々であることを知った。そして卒業後も法医学教室に入って40年間、「死とは何か」について携わってきたが、いまだに回答は得られていないといえます。

法医学の対象は普通死ではなく異常死です。路上・山中・川、そして意外に多いのが入浴中、突然死や救急車で運ばれた患者の死体は「異常死届義務」があるために解剖が行われます。最近ではCTや体液検査もあります。裁判所の許可を受けた死体は司法解剖の対象になります。ちなみに奈良県の場合は、年間の死者は15000人、そのうち司法解剖は200〜300人です。アメリカでは事件性はないか明らかにしたいとすることで解剖する例が高いとのこと。

ここで統計からみて異常死体の10人に1人の割合の「入浴中の急死者」について詳しく報告されました。男女差はなく、70歳以上で寒い

季節に自宅の浴槽内での死亡が圧倒的に多い。

その死因は何か。血圧の変動・不整脈の出現・血液粘度の急上昇・脳梗塞などの病死の場合と顔が水面下にあつて溺死（外因死）の場合がある。東京都監察医の報告では、病死401例中、脳血管疾患が90%であり、溺死の場合、多少水を飲んでいても病死が原因でもあり得るので判別は困難。ここで特に注意したのは42℃以上の湯温は危険だということ

です。もう一つ注目したのは孤独死。最近多くなり、とくに60歳代の病死が圧倒的で心疾患が多く、次いで消化器疾患です。外傷死では転倒による頭蓋内損傷が多く、次いで意外なのは男性に多い食物誤嚥による窒息死です。

こうした死者・遺体と向き合い、多くの死を見てきました。先にも言ったように高校生の時友人の死に出会った。人はなぜ死ぬのか。これも若い時2度ほど溺れかけたことがある。そこで知ったのは危険なところへは行かないことだったが、死は突然にやってくる。考えていて不眠症になった。そして思ったのは「明日死ぬかもしれない。いま生きている現実を大切に生きること。人生とは一日一日が勝負。いまという一瞬を大切にする」ということでした。

法医解剖に際して遺体を検案し、小さな傷でもどうしてなのかと考える。小さな変化を視覚によって見ようとする気持ちが大変。「親は身をもって子供をかばう」という献身の愛を發揮するように法医解剖にも愛は必要なのです。

5月の京終さろんは、**畑中廣之**さんによる「**双方向紙芝居**」です。畑中さんは38年間小学校教諭として勤務し、1890年から桜井市南小学校の非常勤講師として、自作の紙芝居を使って授業しています。一

般の紙芝居とちがうのは「双方向」という聴衆との対話を取り入れた独特の趣向を凝らしたものです。その典型が「クイズ」に答えた人にカードを渡す形式です。出し物は桜井市で始まった相撲の話、仏教伝来の話、聖徳太子が百済から伝来した土舞台での芸能…。



大人でも興味深いテーマを取り上げています。この日の会場は小学生ではなく、50代、60代、いや70代の人々でしたが、若返って楽しんでいました。出し物は短いクイズをばさんで、行基伝説、奈良町の鬼追いかけ（不審が辻）の話、四条畷雁物語など身近なこともあったでしょう。一時間30分のオンライン中継はあっという間に終わってしまいました。

.....

6月は「大正から戦後にかけて山間輸送の大動脈として活躍した物流ロープウェイ**奈良安全索道物語**でした。話し手は「大和高原文化の会」の浦川温亮さん、西谷征夫さん、岡井稲郎さんの三人。京終さろんを始めた頃にも安全索道がとり上げられ、主に京終駅近くに集積される山間部からの輸送品が話題になりましたが、今回はその同じ索道でも山間部の活動が主体でした。これで両端がなくなったことになります。

まず浦川さんがスライドを使って説明……。索道は奈良県では明治44年に五條・橋本間に「大和索道」が(株)安全索道商会によって設置されて以来、県内に人・物輸送に24基が運営したとのこと。

「奈良安全索道」は其の14番目であり、当初は京終から南田原の天満駅まで約8キロ。旧伊勢街道に沿って開通したのが大正9年7月のことでした。その祝賀式当時、大流行したスペイン風邪のため人の集まりは自粛の羽目に陥ったと……。しかし人々は「東京銀座節」の替え歌で喜びを表したとのこと、岡井さんは索道に乗った経験を持つ最後の生き残りと自称し、替え歌を美声で披露されました。そして翌年には南田原天満駅から針駅まで6キロ、さらに翌々年（大正11年）針駅から小倉駅まで約3キロが、単線自動循環式の電動モーターによるワイヤーロープで結ばれた。支柱は総数111本。その痕跡は今もかなり残っています。

索道で運ばれた物品は木材、薪炭、柴、野菜、コメ、その他農産物ですが、とくに有名なものが「凍り豆腐」……。ここで西谷さんの登場。「高野豆腐」は江戸時代から知られていましたが、大和高原の寒さは天然凍り豆腐造りに適していて農閑期の副業として「凍り豆腐」づくりが広まっていました。索道完成によって消費はさらに広がった。



昭和8年の索道会社の営業報告書は「小倉山凍豆腐事業の不振が当社の営業に甚大な打撃……。唇齒哺車（一心同体）の関係にして……と記録されています。索道は戦時下でも生活に必要不可欠とされ戦後まで存続しましたが、自動車輸送の発展によって、昭和27年に廃線になりました。

終天神の歴史よもやま話(三)

天下の流行の中心になった話

大塚恒平(相模原市)

京終天神について、第一回は創建が一五世紀まで遡れそうという話、第二回はもう一つの源流が一七世紀勧請の富士権現にありそうという話を紹介しました。第三回は、京終天神が一七世紀ごろに天下の流行の発信地になった話題をとり上げます。

わび茶の祖村田珠光をはじめ、多聞城の松永久秀、光林寺の紹巴、高坊など著名茶人を多く生んだ奈良ですが、安土桃山から江戸初期には春日大社神官の家に生まれた久保権大輔利世がいました。号を長闇堂といひ、野田村(いまの春日野国際フォーラム豊付近)に同名の庵を建てていました。「長闇堂記」によると、天正3年(1575)、彼が4・5歳のころ、秀吉の北野大茶湯において築庭で有名な小堀遠州に出会い、親交を深め後に「長闇堂」の名前と庵の扁額を彼からもらっています。

小堀遠州といえば、利休、織部と茶道の二大系譜を受け継ぎ、将軍家茶堂指南役を務め、築庭などにも才能を発揮し、その好んだ事物が「遠州好み」と呼ばれ、今でいうインフルエンサー(影響者)のような役割を果たした人です。遠州は古い石造物の庭園石材への転用を好み、その調達に権大輔が協力していました。

「長闇堂記」には権大輔が橋本町(猿沢池付近)にかかる橋の擬宝珠を加工し京終天神の手水鉢に転用していたのを、遠州が興味を持ち譲り



いまの京終天神社

受け、自庭に据えた後に江戸の將軍秀忠に献上した記録があります。同様に京終天神にあった仏像を彫刻した車除けの石も、権大輔が石灯籠の竿に加工したのを遠州がもらい受け、やはり自庭を経て江戸の秀忠屋敷に据えられたそうです。後に一般には「織部灯籠」「キリシタン灯籠」と呼ばれるようになる仏像彫込みの灯籠も「遠州好み」であり、その天下に流行する大元が京終天神だったのです。

さて、権大輔と遠州が京終天神の石を織部灯籠にして將軍に献上した時代は、第二回で述べた五条天神と富士権現が合祀される前だったのでしようか、それとも後だったのでしょうか。灯籠を秀忠に献上した年代は不明ですが、富士権現の勧請は1614年のことで、大火で京終天神が来歴不明になったのは1706年。この90年間のどこかで合祀はあったと思われませんが、秀忠の隠居は1623年で、富士権現は勧請されたばかりの頃です。二社が合祀しなければならぬ理由もまだなかったでしょうし、合祀される前だった可能性も高いです。この逸話は、合祀前の京終天神で起きた出来事を記す唯一の事例かもしれません。

京終天神が、仏像彫込みの織部灯籠が天下の流行になる発信地であった逸話は、おもしろいのですがほとんど知られていません。逸話にまつわる残された事跡が少ないのが少し弱いところです。ここに少し面白い現代アート作品があり、それは美術家長谷川維雄さんが2009年に発表した「地蔵コイン」です。交通規制用カラーコインの横面にお地蔵様が彫り込まれています。ミニチュア版がガチャガチャのロングラン景品として展開もされています。見た目はまさに現代版・織部灯籠の趣なのですが、この地蔵コインとガチャガチャを織部灯籠発祥地の象徴として京終天神に設置し、観光用にできないか妄想しています。神社での地蔵コイン設置は、神仏分離の現代では難しいかもしれませんが、許されるなら私の個人的活動としてでもやれないかと夢みています。

今回は、元々の京終天神は五条通りに沿っておらず、社殿が西向きだ

った話題を紹介します。

先代旧事本紀

橋本健一（名古屋市中）

序文「大臣蘇我馬子宿祢等奉勅撰……聖徳太子且二撰スル所……時三十年歳次壬午春二月朔己丑」とある。

この本の構成は、それぞれ某本紀として十巻に分け書き並べてある。

第一巻	神代紀	第二巻	神祇本紀
第三巻	天神本紀	第四巻	地祇本紀
第五巻	天孫本紀	第六巻	皇孫本紀
第七巻	天皇本紀・上	第八巻	神皇本紀
第九巻	帝皇本紀	第十巻	国造本紀

先づ神話から始まり、巻第五に物部氏の遠祖宇摩志麻治命が登場し、天皇暦を巻七・八・九の三部に無理に分け、諸国の国造で終えている。私的に興味ある部分を抜粋して載せます。

巻第七は何故か「天皇本紀上」とある。第一代神武天皇から始まり官位として「臣・連・伴造・国造」とあるのは、推古二十八年録の記事を張り付けて「足尼・大臣・大連・宿祢」などの称号を加えて体裁を調えている。欠史とされる各々が続き、神功皇后までが「上」の部であるが「下」の部はない。

巻第八 神皇本紀は欠史の第十五代応神天皇から始まり、第二十一代雄略天皇を経て第二十五代武烈天皇に至る。三国時代魏の曹植の著『楽府詩集』飛龍「我に仙薬を授く神皇の造る所なり」とあり、「神皇」とは神を云う。

巻第九 帝皇本紀は第二十六代継体天皇から始まり、第二十九代欽明天皇条文に仏教公伝と物部尾輿の廃仏毀釈は書かれていない。『晋書』第六十二巻成公綏「帝皇は紫宮に於いて坐を正す」とある。第三十代敏達

天皇条文には物部守也の廃仏毀釈を載せていない。第三十一代用明天皇条文に「物部守屋連公を大連と為され、さらに大臣とした」と作部をして蘇我馬子大臣を僅少に書いている。第三十二代崇峻天皇条文には、蘇我と物部が起こした丁未の変は載せていない。第三十三代推古天皇条文に聖徳太子を美化して書き、「二十八年二月十一日……先代旧事、天皇紀及び国記、臣、連……」は日本書紀からの流用であるが、月数を間違えている。

第十巻 国造本紀における「加我の国造」に「嵯峨朝の御世に弘仁十四年（823）に越前国を分割して加賀国にした」とある。

この他の専門的な内容を割愛して、先代旧事本紀の成立は九世紀中頃らしい。

弘仁十年（819）の『日本書紀私記』序に「天皇は稗田阿礼に勅し、帝王本紀および先代旧事を習わせた」とあり、ここに「先代旧事」と「本紀」という語が揃う。題名『先代旧事本紀』はこれから始まったらしい。

本居宣長は『古事記伝』の「一の巻、旧事記という書の論」において「文体が一つ物にならず、諺に木に竹を接げりとか云うが如し」と言い放っているが、「先代旧事本紀巻三の饒速日命が天から降った時のことや巻五の尾張連、物部連の世系や巻十の国造本紀などは、どの本にも見えないので他に古い本があったのから採ったのであろう」という。

当本紀の編纂者興原敏久は弘仁格式の編纂者の一人であり、確かな見識者であったから全面的に信頼できる適任者である。

編纂者は興原一人ではないはずで、序文中の日付の干支に間違いが見られ編纂の仕方も拙劣で古事記と日本書紀とは文体が違うのかまわずに切り貼りしている。それでも本紀を本気で信用するべきである。当本には古事記と日本書紀に欠けている部分を補っていて重要な資料になる。特に第五巻天孫本紀の物部系譜にいたっては唯一の頼みの綱であり、武内宿祢の祖父「彦太忍信命」が載るにより紀氏の神話上の先祖が見ら

れ、我々紀氏一族は興原敏久先生に感謝するべきである。

璉城寺の謎とロマン

藤かかりぬる木は枯れぬるーその3

野尻幸男

藤原氏が最も栄えた平安時代、「藤かかりぬる木は枯れぬるものなり。いまぞ紀氏はうせなんずる」と書きとどめた『大鏡』は、中臣鎌足以降十三代の子孫が築いた、摂政・関白・太政大臣・左右大臣など20人の経歴をエピソードでつづった「伝記・列伝文学」作品です。記述には誇張や歪曲があり、どこまで信頼できるか気になります。鎌足の没年(669)から道長が生存していた1020年頃まで、約350年間の史実を「いまぞ紀氏はうせなんずる」という角度から取り上げます。

藤原氏繁栄の一方で「枯れてしまった氏族は鎌足と同時代に盛えた蘇我、阿部、石川、大伴氏も紀氏と同様であり、政権の場から消え去り藤原氏一人勝ちですが、その権勢を維持した裏に女性の活躍があったことは間違いありません。『大鏡』を下敷きに藤原氏 VS 紀氏の人物を一覧表にしました(次ページ)。

春日さす藤の裏葉のうちとけて・・・

紀氏の場合をみると、志貴皇子に嫁した椽媛が白壁王(光仁天皇)を生んだことで、死後、皇后位を贈られています。これが紀氏の唯一の皇位者でした。

それに比べて藤原氏は違います。鎌足が天智天皇から懐妊中の女性を授かり、生まれた子が不比等だということが始まります。

その不比等の娘**安宿媛**が聖武天皇の皇后になったのは有名な話です。四人の兄弟が長屋王の反対を封じ込め、臣民初の皇后**(光明)**になりました。それ以来、皇后の位に就いた女性は、桓武天皇の**乙牟漏**(良継の娘)、

平城天皇の**帯子**(百川の娘)、醍醐天皇の**穩子**(基経の娘)、村上天皇の**康子**(師輔の娘)、円融天皇の**嬪子**(兼道の娘)、一条天皇の**定子**(道隆の娘)と**彰子**(道長の娘)、後一条天皇の**威子**(道長の娘)でした。さらに、皇后の名称ではなく「夫人」や「女御」として実質第一夫人となった女性も多くいます。

文武天皇の**宮子**(不比等の娘)、仁明天皇の**順子**(冬嗣の娘)、文徳天皇の**明子**(良房の娘)、清和天皇の**高子**(長良の娘)、宇多天皇の**温子**(基経の娘)、花山天皇の**低子**(為光の娘)などがあげられます。

また、皇后・夫人・女御・妃・などを取り混ぜた配偶者のうち、藤原氏の子女を実数と比率をみると次のようになります。

桓武天皇には皇后・夫人・妃・女御(20人)合計26人のうち藤原氏が9人で**35%**、**嵯峨天皇**が皇后・夫人・妃・女御・更衣(22人)計29人中藤原氏が2人、**仁明天皇**は皇后・女御。更衣合わせて12人中、藤原氏は5人で**40%**。**文武天皇**は女御18人中、藤原氏が7人で**39%**。**清和天皇**は女御25人中、藤原氏が7人で**28%**。宇多天皇は女御10人中藤原氏が5人で**50%**。**醍醐天皇**は皇后・妃・女御合わせて16人中、藤原氏6人で**37%**。**村上天皇**は皇后と女御11人中9人が藤原氏で**81%**。**一条天皇**は皇后・女御5人がすべて藤原氏**100%**、**三条天皇**も4人の配偶者すべてが藤原氏(**100%**)です。

『大鏡』に記載された藤原氏は天皇の許へ娘を嫁がせ、生まれた幼な児の世話役と称して国家の政(まつりごと)を内覧する。つまり男も女も持てる限りの知恵と能力を発揮して摂政関白の道を確立したことで藤原氏は他の氏族に付け入るスキを与えませんでした。「この世をば望月の欠けたることなし」と詠んだ道長はその代表格です。

天皇	藤原氏 (父)	位	紀氏
天武	水上娘 (鎌足) 五百重娘 (鎌足)		
文武	宮子 (不比等)	夫人	竈門娘 (父母不詳)
聖武	安宿媛 (光明子・父不比等)	皇后	
光仁			母・椽媛 (諸人) 宮子 (父母不詳)
桓武	乙牟漏 (良繼)	皇后	
	旅子 (百川)、吉子 (是公)	夫人	乙魚 (不詳) 夫人
	東子 (種繼)、河子 (大繼)	夫人	若子 (船守) 夫人
	小尿 (鷺取)、仲子 (家依)	夫人	
	上子 (小黑麻呂)、平子 (乙叡)	夫人	
平城	帶子 (百川)	皇后	
	葉子 (種繼)	妃	魚員 (木津魚)
嵯峨	緒夏 (内麻呂)	夫人	〇〇 (不詳)
仁明	順子 (冬嗣)	女御	
	沢子 (総嗣)、貞子 (三守)	女御	
	加登 (福麻呂)、小子 (道長)	更衣	種子 (名虎) 更衣
文徳	明子 (良房)	女御	静子 (名虎) 女御
	古子 (冬嗣)、年子 (不詳)	女御	(男子が惟喬親王)
	多幾子 (良相)、是子 (不詳)	女御	
	今子 (貞守)、列子 (是雄)	女御	
清和	高子 (長良)、佳珠子 (基経)	女御	
	多美子 (良相)、頼子 (基経)	女御	
	(良誓、真宗、仲統、諸葛の娘)	女御	
光孝	佳美子 (不詳) 元春 (山影)、	女御	
宇多	温子 (基経)、胤子 (高藤)	女御	
	褒子 (時平)、(有実、継蔭の娘)	女御	
醍醐	穩子 (基経)	皇后	
	能子 (定方)、和香子 (定國)	女御	
	桑子 (兼輔)、淑姫 (菅根)、鮮子 (速永)	更衣	
朱雀	慶子 (実頼)	女御	
村上	安子 (師輔)	皇后	
冷泉	懐子 (伊尹)、超子 (兼家)、怱子 (師輔)	女御	
円融	媯子 (兼道)、遵子 (頼忠)	皇后	詮子 (兼家) 女御
花山	柅子 (為光)、姚子 (朝光) 諲子 (頼忠)	女御	
一条	定子 (道隆)、彰子 (道長)	皇后、	義子 (公季)、元子 (顕光) 尊子 (道兼) 女御
三条	妍子 (道長)、城子 (濟時)、綏子 (兼家)、原子 (道隆)	皇后、	
後一条	威子 (道長)	皇后	
後朱雀	禧子 (道長) 道長	皇后	生子 (教通)、延子 (頼宗) 女御
後冷泉	寛子、歆子 (頼道)	皇后、	
後三条	昭子 (頼宗)、茂子 (公成)、	女御	

再来年（2024年）のNHK大河ドラマは「紫式部」だそうです。

『源氏物語』に「藤裏葉の宴」の場面があります。世俗世界の葛藤が展開されるなかで貴族たちは「宴」を開きます。風情ある松にたくさんの花房をつけた藤の花が寄り添った庭園で夕刻に行われる新婚の宴の場面です。「たおやめの袖にまがへる藤の花 見る人からや色もまさらむ」と祝福されつつ花婿は花嫁の新床へみちびかれる…。と、田辺聖子さんは「源氏紙風船」で描写しています。女性は十二単衣で飾り「宴」を楽しみ、そして愛の営みにいそしむ。そんな平安朝の人々…。

道長の娘・彰子（上東門院）は、藤原家と天皇家の家長として人々を掌握、指図し、氣丈夫に生涯を送ったと服藤早苗氏は「藤原彰子」の人物像を紹介しています。

璉城寺のご本尊

「上東門院の心の悩みを聞いて恵心僧都がお造りになりました」と、璉城寺では先代住職の声で本尊白色裸形阿弥陀像を紹介しています。今年も多くの人々が拝観されました。等身大の上半身が裸、しかも女性。靈氣あふれる阿弥陀仏に接して涙を流す人もいます。



なかには「皇后さんの仏さまがどうしてこのお寺にいらっしやるのか」という質問がありました。これこそ、璉城寺の最大の謎です。正解とする記録はありません。説明不十分でも多くの人々は古い時代の出来事とその神秘さを感じられて納得されるようです。したがってこれ以上の詮索はどうかと思いますが、歴史的事実として謎を解くヒントをとりあげることになりました。

まずは「上東門院の心の悩みを聞いて恵心僧都がお造りになった」というくだりです。上東門院（藤原彰子）が一条天皇の許へ入内（興入れ）したのが長保元年（999）12歳でした。そして長男（後一条）と次男（後朱雀）を相次いで出産したのが九年後の21歳と22歳でした。しかし、その喜びも束の間、翌々年（寛弘8年・1011）夫一条天皇が32歳の若さで亡くなりました。

上東門院が大きな悲しみに打ち沈んでいたころ、「往生要集」を著し「二十五念仏三昧会」を立ち上げていた恵心僧都は60歳後半、一条天皇の死から9年後に恵心僧都も76歳で入滅します。上東門院と恵心僧都、この二人が直接面談した記録は見つかりませんが、璉城寺との関係を加味すると、当時の璉城寺の本山だった洛陽・誓願寺に行き当たります。恵心僧都は「二十五三昧講をこの寺で始めた」と『誓願寺縁起』に書いています。そして「誓願寺は恵心僧都が奈良の寺を起こした」として璉城寺の存在にもふれています。誓願寺で行われた「二十五三昧講」に上東門院はじめ女官として仕えた紫式部や和泉式部ら多くの女房が参籠しています。誓願寺と縁を結んだ上東門院が『誓願寺縁起』に記されている元祖の寺（璉城寺）にご本尊がないことを知ったとすればどうでしょうか。

どうして璉城寺に本尊がないのか。阿弥陀如来は長岡京への都移りによって寺の移転とともに運ばれていた事実。さらに当時の一条天皇（六六代）からさかのぼること十代前の56代清和天皇即位にかかわる「天

皇生誕」の事実が絡んでいたことを知ればなおさらのことです。

その事実とは清和天皇の父文徳天皇には紀静子から生まれた長男・惟喬親王が皇太子になるとみられていたのに、時の大臣藤原良房は娘の明子あきみを入内させ男子出産を願った。そして「春日地蔵」の効験によって四男惟仁親王が生まれ、一歳にも満たない幼児が皇太子になった事実…。第56代清和天皇の誕生は春日地蔵に祈願したお蔭だった。その地蔵尊が紀氏の氏寺璉城寺にあったのでは藤原家にとって具合が悪い。とばかりに二キロほど南へ「染殿（藤原明子）が出産祈願をした地蔵尊の寺」として帯解寺が創建された。という事実を上東門はどう受け止めたでしょうか。江戸時代の『大和志料』に帯解寺の地蔵菩薩像はもと璉城寺にあったと記されています。

上東門院の後半生は藤原家と天皇家のトップリーダー（家長）として弟頼道の関白職を助ける一方、父道長の遺志をうけて仏教に傾倒し、出家した身でもって神社仏閣への参詣や布施を行っています。こうした上東門院自身か、あるいはその心を受け継いだ誰かが裸形阿弥陀仏像を奈良の璉城寺へ移設をしたと考えられないだろうか。残念ながら道長や側近たちの日記（『御堂関白記』『権記』『左小記』など）のような文字記録が上東門院の後半生には極端に欠けています。



璉城寺の本尊にまつわる謎は、「藤にかまれた木」、すなわち紀氏が藤原氏と同様に皇族と婚姻関係を保っていた時代のできごとです。その謎を解くヒントは的外れかもしれませんが、いつ、だれが、どんな事情で阿弥陀像を璉城寺にもたらしたかの確証はありません。が、不可能な推理ではないといまは思っています。

編集後記

コロナ感染、ロシア軍のウクライナ侵略、参議院選挙のさ中に第70号の発行日を迎えました。人生なら古希の祝いの節目です。そして振り返れば、初号の発行から満18年目。選挙権を行使できる成人に達したことになります。

田辺実氏の呼びかけで集まった会合で申し合わせたのは「教員を定年退職した途端に亡くなった和弘住職のあと、奥さんが苦勞されている。いまは小さいが歴史ある寺に光を当てよう」というものでした。そして「璉城寺友の会」の会員を募り、機関誌を発行することになりました。

18年経過してみると、当時のスタッフのうち3人は鬼籍に入り、大黒柱の田辺氏は重要な任務に就かれてしまいました。

70号の紙面を眺めると「なんと幼稚な編集」というのが実感ですが、「友の会」やご近所・友人のご協力によって支えられて実施した催しも欠かせません。2回にわたるファッシュンショー、大人のお月見会などの楽しい催し。大阪樟蔭女子大学が行った発掘調査と璉城寺所蔵の古文書の調査。さらに紀氏の氏寺にかかわる寺院や遺跡をめぐるツアーなど。「光を当てる」という目標は、紙面編集だけではなく、多彩な催しこそが結実でもあったと思います。

このアイデアの多くは住職の発想によるものであって、「良寛さんのお寺のようにしたい」という願いを活かす催しでした。いま取り組んでいる「俳句」「うたごえ」「ヨガ」などの定例的な催しと随時のアイデアを活かした取り組みも多彩です。

さて、70号を機に今後どうなるか。次世代へバトンタッチするのが常道でしょうが、その相談はできていません。いましばらくは私の寿命と健康がつづくかぎり頑張りたいと思っています。 野尻幸男